

東部ポリネシア諸言語における「方向詞」記述の比較と考察

—ハワイ語方向詞（空間用法）記述の観点から—

岩崎加奈絵

kanaiwasaki@hotmail.co.jp

キーワード： ハワイ語 東部ポリネシア諸語 方向詞 文法記述 空間表現

要旨

東部ポリネシア諸言語に広く見られる *directional (particle)* と呼ばれる機能語の 1 カテゴリーは、先行する語彙、典型的には動詞の示す動作・行為の〈向き〉を示す機能を担っている。しかし、いつ、どのように使用できるか、あるいは〈向き〉の設定の基準が誰、何であるか、さらに文章中でそうした基準がどのように交替していくかなど、あいまいな点が残る。

本稿では、インタビュー調査が困難であるハワイ語の、文法記述における方向詞の分析の不足を解消するため、同系統の東部ポリネシア諸言語における *directional* の記述を比較した。その結果、1) ハワイ語研究ではまだ一般的ではないが、方向詞には「絶対軸表現」と「直示的表現」の下位分類を加えるべきであり、また、2) 同一音形に多様な用法の可能性があるため、方向詞とされる 4 語は、カテゴリ化とそのカテゴリに含まれる範囲に拘るより、形の面と意味の面との両方を考慮した、全体像を把握しやすい記述を並行して行うべきと考え、一例として *mai* の記述を挙げた。

0. 導入

本稿では、オーストロネシア語族マラヨ＝ポリネシア語派に属する、ハワイ語・南/北マルケサス語・ラパヌイ語・マオリ語・タヒチ語などを含む、いわゆる「東部ポリネシア諸言語」における機能語の一類「方向詞 (*directional*)」について、各言語での研究状況を確認したうえで、特にハワイ語の空間用法の方向詞記述について考察する。

東部ポリネシア諸言語は太平洋地域に散在する島々の言語であり、現在では各地の歴史・政治的背景から、実質的に日常使用されている¹ものは、例えば先述の言語では南または北マルケサス語、タヒチ語、ラパヌイ語²に限られる。一方で、ハワイ語やマオリ語など、母語話者が極端に減少した経緯があるものの、民族・文化的理由等により積極的に学習されるようになった、言語再活性化 (*revitalization*) の例とされるような言語もある。

こうした言語に共通する語類として認められるのが方向詞である。方向詞自体は東部ポリネ

¹ 各言語の話者数には諸説あるが、*Ethnologue* によれば以下の通り。

ハワイ語 2000 人 (2007)、マルケサス語 (南北計) 8000 人超 (2007)、マオリ語 60000 人 (2011)、タヒチ語 63000 人 (2007)、ラパヌイ語 2400 人 (2007)。カッコ内の数字は調査年を示す。

² ただしラパヌイ語は危機言語でもあるといえる。その他の言語でもフランス語や英語のような強力な言語の影響は少なからずあり、いずれにしても、安定している言語というのは当該地域では希少である。

シア諸言語に限定されず、より高い分岐にまで辿っても見つけることができる。directional というラベルで呼ばれるとは限らないが³、祖形を同じくすると考えられる各言語の語に共通するのは、「現象 (典型的には行為) の向き」の表示を行うことである。

記述の際、多くは空間移動やモノのやりもらいを基本としている。さらに、厳密な派生の方向は現時点では不明だが、同じ語が時間表現、比較表現などにも用いられている。それ以外の用法を認める言語・研究もあるが、それらは各言語固有の特徴であるとして本稿では扱わない。

方向詞は必須であると言われることは少ないが、各言語において句構造分析の際に必ず言及されているといえる。また、出現頻度も総じて高いといえ、当該地域の統語研究において注目を集めてきた要素である。しかし同時に、使用規則や、同一語彙をヘッドとする句で方向詞の有無に関するミニマルペアがある場合に何らかの差異が生じるかなど、重要な要素でありながら更なる研究を要する状況にあるという点もまた共通しており、今なお議論の余地と必要性が十分にあるものである。

1. 各言語における方向詞

本節では各言語での方向詞について簡潔に概観する。

1.1 ハワイ語⁴の方向詞

代表的な研究の Elbert and Pukui(1979)、およびより新しい知見を紹介する Schütz, Kanada and Cook (2005:10, 16, 86, 118) における記述によれば、おおよそ以下のように方向詞を特徴づけることができる。

まず基本的な意味・用法について、それぞれ次のように述べている。

表1 ハワイ語の方向詞とその意味

	Elbert and Pukui(1979:91)		Schütz, Kanada and Cook(2005)	(本稿での) およその意味
aku	far or away from the speaker	future	away	離れていく
mai	toward the speaker		here(toward first person), in this direction, in the direction toward the focus of narrative	近付いてくる
a'e	visible, sometimes near addressee		upward, back and force, sideways, any direction not directly toward, away or downward	上へ
iho	downward, self	reflexive, near future	downward, self	下へ

³ 以下、本稿では特に注記が無い限り、ハワイ語を中心とすることから同言語で一般的に使用される <directional>およびその邦訳『方向詞』を、東部ポリネシアの今回問題とする機能語の呼称として用いる。

⁴ ハワイ語は米国ハワイ州を中心に分布する言語で、母音 a, e, i, o, u とその長母音 ā, ē, ī, ō, ū、子音 h, k, l, m, p, w, n, 'ʻʻ] で表記される。類型論的には孤立語であり、文は動詞文と名詞文に大別されるがいずれも「[述語]±[主語]±[目的語]±[その他の要素]」という基本語順である

両先行研究とも iho については身体に関わるもの、という記述をしている。

これらは任意に動詞に後続し⁵、その動詞が示す動作や行為に関して、〈向き〉を付加する。例えば英語や日本語では語彙的に別である「行く」「来る」は、「移動する」意の動詞に方向詞を付けることで表される。

(1) E hele mai 'oe ia'u!⁶
 IMP move DIR 2SG DOBJ-1SG

「私の方に来なさい」

(2) E hele aku 'oe i Waikiki!
 IMP move DIR 2SG DOBJ W.

「ワイキキに行きなさい」

(3) E noho iho 'oe!
 IMP sit DIR 2SG

「座りなさい」

(4) E kū a'e 'oe!
 IMP stand DIR 2SG

「立ち上がりなさい」

(Hopkins 1992:22)

基礎的な記述では空間移動の表現が目立つが、実際にはやりもらいや知識の授受など、動詞の意味に関連して何らかの向き・移動方向が問題になる場合には広く用いることが出来る。

(5) Ke a'o mai nei nā haumāna.
 TA teach/be taught DIR DEM ART student-PL

「生徒たちは教わっている」

(6) Ke a'o aku nei ke kumu.
 TA teach/be taught DIR DEM ART teacher

「先生は教えている」

(塩谷 1999:49)

こうした〈向き〉を表示する機能は、動詞に後続する場合だけでなく、方向詞それ自体が述語動詞として働くときにも表れており、例えば mai は「来る」、iho は「下る」とい

⁵ ただし、動詞との間に受け身マーカ―など、いくつかの語が入る可能性はある。また、ポリネシア諸言語一般に言える事として、方向詞は典型的には動詞句中の機能語だが、Elbert and Pukui (1979) では位置名詞・地名を中心に名詞に後続する例を挙げているように、厳密には「先行する内容語」の向きを表示すると考えるべきという指摘も有り得る。ただし、イディオムを除けば圧倒的に動詞句の例が多いこともまた事実であり、ポリネシア諸言語における品詞認定の問題とあいまって、この問題は更なる詳細な議論を要する。

⁶ 以下注記が無い限り、本稿における例文のグロスと、英語・ハワイ語文献の和訳は筆者による。

⁷ これを方向詞の機能の1つと見なすか否かは研究ごとに立場がことなり、Pukui and Elbert (1986) では mai については方向詞の項目中で動詞用法を、iho では方向詞と別に動詞の項目を設定するなど、必ずしも明確では

うようになる。

さらに時間表現および比較表現にもよく使用される。これらについては近年の先行研究がそれぞれあり、例えば Cook (1996) では時間表現で、方向詞が時間的隔たりの程度を表現できる点で特徴的と考えている。また塩谷 (2007) では比較表現における方向詞の使用に分析を加えており、比較の場合特定の「比較動詞」と共起する場合と方向詞単独で比較の意を示す時とで使用可能な方向詞の数が異なり、また比較の性質により使用できる方向詞の種類が異なるとしている。

例文(7)は時間表現の例、(8)は塩谷(2007)で Hawaiian laws⁸より引用している、方向詞のみによる比較の例である。

(7) kēlā pule aku nei / i kēia mau lā iho
DEM week DIR DEM PREP DEM PL day DIR
「先週／近い(数日の)うちに」(Elbert and Pukui 1979: 92)

(8) Ina i nui ka eha, alaila, nui aku ka uku, ...
if TA big ART wound then big DIR ART fine
「もし傷が大きいようなことがあれば、罰金はより大きくなる」 (塩谷 2007:20)

方向詞が実際にどのくらいの頻度で使用されているかについて、岩崎 (2014) では、ハワイ語で書かれたテキストが盛んに発行されていた時期である 19 世紀末～20 世紀初頭中心の文献資料から得られた方向詞全ての、および各語ごとの延べ語数を提示した。コーパスの総語数が約 16 万 8000 語であるうち、明らかな同音異義語を除いて約 7000 語と、頻度は高いといえる。ただし、語ごとに見ると、mai、aku と a'e、iho の 2 グループでは出現頻度が大きく異なり、前者が後者の 2~3 倍にのぼった。

また、ハワイ語に関連して、ハワイ語をもととするピジンである Pidgin Hawaiian⁹では、方向詞は残ってはいるものの、mai、aku と maluna、malalo の 4 語に変わっているという報告がある (Roberts 2013)。maluna と malalo はそれぞれハワイ語の「上に」「下に」にあたり、前置詞と位置名詞による複合語である。この変化は、語彙・文法の簡略化という観点から言えば経済性に適っていると言えるとともに、mai、aku と a'e、iho の 2 グループの間にある線引きを示す一例であるとも考えられる。

ない。

⁸ Hawaiian laws 1841-1842, reprinted by Ted Adameck (1994)。なおこの例文については、グロスが筆者が本稿の形式に合わせた形を提示し、和訳は塩谷 (2007) による。

⁹ Pidgin Hawaiian は 1800 年代を通じて使用された、ハワイ語を元とし、形成されたピジンである。元々はハワイ人と非ハワイ人のコミュニケーションに、後にはハワイ諸島の砂糖産業に従事した中国人・ポルトガル人・日本人のコミュニケーション手段として使用されるようになったとされている (Roberts 2013:119-127)。

1.2 マルケサス語¹⁰の方向詞

マルケサス語は北マルケサス方言 (Nuku Hiva, 'Ua Pou, 'Ua Huka 各島を中心に使用される) と南マルケサス方言 (Hiva 'Oa, Tahuata, Fatu Hiva 各島を中心に使用される) に分けて記述されることが多い。

マルケサス語の空間表現について詳細に扱った Cablitz (2006) は、コンサルタントの協力の元調査を行い、かつ綿密な分析を加えている点で、東部ポリネシア諸言語の空間表現の研究としては突出したものであるが、この研究では、方向詞をダイクシスと関係づけて記述している。

同研究では北マルケサス方言の方向詞相当類、方向小辞“directional particles”を定義する際、speaker/addressee の語を用いつつも同時に“deictic center”を用いている。そして記述上重要なのは、空間用法についていえば、iho と a'e/ake は絶対的垂直方向軸の動きについて指す一方、aku と mai は直示的表現法であり、移動についての見方が異なることを明確にしている点である。

mai	towards speaker or a deictic center other than the speaker and addressee (e.g. location which is in the focus of attention)	
atu	towards addressee, away from speaker and towards a location, entity or person other than the speaker	
iho	downwards	
a'e/ake	upwards	(Cablitz 2006:427、太字は筆者による)

Cablitz はこれらが、動詞句でも名詞句でも後置小辞として現れることができると明確に定義している。もともと、典型的には「動詞、位置名詞、名詞化した動詞句のヘッド」に後続するものであるとしており、出現する位置の数的な偏りは少なからずあると考えられる。

また、共起する語について注目すべきところとして、mai と aku が動詞句中で空間表現を担うのに対し、iho と a'e/ake が空間用法を担う事が出来るのは、名詞句中で特定の語とともに使用されるときのみという分析をしている。

1.3 マオリ語¹¹の方向詞

マオリ語統語研究で方向詞に相当する要素は方向小辞 (directional particle) と呼ばれる。

¹⁰ マルケサス語はフランス領ポリネシアに含まれるマルケサス諸島で主に見られる言語である。南北の別がされることが多く、音素についても方言差があるが、およそ母音 a, e, i, o, u とその長母音 ā, ē, ī, ō, ū、子音 p, t, k, ʔ, h, (f), v, m, n, (ŋ), r で示される (括弧内は地域差があるもの)。基本語順は VSO とみられる。

¹¹ マオリ語はニュージーランドを中心に分布し、同国の公用語のひとつとされている先住ポリネシア人の言語である。母音は a, e, i, o, u とその長母音 ā, ē, ī, ō, ū、子音は p, t, k, m, n, ng[ŋ], wh[f], h, r, w からなる。基本語順は VSO とされる。

表2 マオリ語の方向小辞とその意味

	Bauer (1993:470)	Harlow (2007:147)
mai	hither, towards speaker	towards the speaker
atu	away from speaker	away
ake	upwards from speaker	upwards
ihō	downwards towards speaker	downwards

Harlow (2007:147-148) によると、マオリ語の後置小辞 (postposed particle) は基本的に、動詞や名詞など、先行する語の品詞に左右されず同形・同語が現れることができる。そしてそうした小辞は被修飾語からの距離によって分類されるが、概ね以下ようになる。

Lexical element - Manner part. [“still”, “other” etc.] - Directional part. - Locational part.

イディオムをよく作る要素であることや比較表現に使用されることなど、他の東部ポリネシアの言語の場合と共通する特徴を持つが、向きを判断する起点については、前述のように speaker としている箇所があるものの、特に定義をしていない。一方で興味深い指摘としては、以下のような例文をあげて、「話者の“view point”や“perspective”をコード化する」としている。この場合、(何らかの意味で) 山が話者の方に向いている、という見方を表現していると捉えることになるという。

(9) te maunga e tū mai rā
 Det. Mountain TA stand Dir. Loc.¹²
 [ART mountain TA stand DIR LOC]

“The mountain standing over there”

(Harlow 2007:147)

別の先行研究として、参照文法の Bauer (1993) には豊富な例文が提示されているが、使用規則については更なる研究を要する、とまとめている点でハワイ語の状況と共通している。Harlow (2007)との差異では、向きを判断する際の基準点については、基本的には「話者との関係で指示する」としており、Hohepa (1981) を参照したうえで、語りの場合、物語の登場人物ではなく語り手に関連付けた位置取りを表す、とも述べている。また、第三者の動きを示す場合は、位置の基準となるのは、(その場に話者が居れば)話者でも、別の参与者でもよい、としている。

さらに注目すべき点として、3人称文、特に話者が関わらない神の視点的文章について、物語の一節における方向詞の使用と、その時々“reference point”の移動を分析する記述を行っ

¹² グロス・英訳は Harlow (2007) により、Det、Loc.はそれぞれ決定詞と位置小辞を指す。他と比較可能にするため、本稿の形式に合わせたグロスを[]内に記してある。

ている。そこでは先行する文の主語が“reference locus”になる場合が多く、その場にいる中でストーリー上「誰が焦点を当てられているか」のマーカ―として機能する、としている。

このように、基準点／焦点／参照点などの、文における変更・移行について触れているのは重要であり、これ以外にも、(i)感情的な近さ・隔たりを mai—atu で示すことや、母語話者のコメントとして、(ii)文を成立させるために必須だと感じられる場合、また反対に話者に関連付けた動きが明らかに含まれていても使用できない場合がある、という指摘があることは留意すべきであり、特に後者は非常に大きな問題であるといえる。

1.4 ラパヌイ語¹³の方向詞

Du Feu (1996) では、ラパヌイ語の方向詞相当語は「動詞フレーム」に属する小辞である。該当するのは mai と atu の2つで、このグループについて特にラベルは用いていない。参照点の設定については話者のみが使用されている。

mai action towards the speaker

atu action way¹⁴ from the speaker (Du Feu 1996:167)

動詞句中の位置は動詞の後ろであるが、両者の間には一部の副詞や態マーカ―が入ることがあるためやや遠くなることもある。

同研究の記述で注目したいところは、第一に mai—aku を与格以外の間接目的語のマーカ―であるとみなしていること (Du Feu 1996:66) である。例文 (15) (16) を提示し、(15) は mai を「話し手の方へ」、後者は atu を「話し手から離れ聞き手の方へ」という解釈のまま、文法機能としてはいずれも間接目的語と判断している。

(10) Ka 'avai mai te puka!
MOM give TOW+SPE book
[TA give DIR ART book]
“Give me the book.”

(11) E haka ma'u ro atu au hai me'e tara.
STA CAUS bring +REA AWA 1s -SPE thing money
[PART CAUS bring REA DIR 1SG ART thing money]
“I'll send you some money.” (Du Feu 1996:66) ¹⁵

¹³ ラパヌイ語はチリ共和国の西部にあるイースター島で主に見られる言語で、母音は a, e, i, o, u とその長母音 á, é, í, ó, ú、子音は h, k, [ʔ], m, n, ŋ, p, r, t, v[β]からなる。また、基本語順は VSO とされる。ポリネシアの言語の中では、文字を有していた点で独自性を持つ。

¹⁴ away の誤りと思われる。

¹⁵ 例文 (15) (16) のグロスと英訳は Du Feu (1996) によるものであり、本稿の形式に合わせたグロスは[]内に示してある。Du Feu (1996) のみの略号は以下の通り。AWA away from subject, MOM momentary, +REA realized

間接目的語マーカーとしての機能を認定する記述は、現状他の言語ではほぼ見られない。

第二に、come と go など、特定の意味を表す場合には mai—atu が必要であると考えられるにも関わらず、実際には動詞句中にそれらが現れなくとも完璧な句構造を成すものであり、必須の要素とはいえない、との言及がある (Du Feu 1996:72)。

以上のように、基本の意味は他の言語の場合と共通しているが、格標識という分析や、方向詞相当のグループに含まれる語が atu—mai <離脱—接近> の1軸のみである点で際立っている。

1.5 参考(1) : ニウエ語¹⁶の方向詞

ニウエ語は区分上、ポリネシア祖語までさかのぼって初めて 1.4 までの言語と同系統に含まれることになる Tongic グループの言語である。ニウエ語統語研究の Seiter (1980:16-22, 83) では方向詞について、基本はこれまで取り上げた方向詞記述と同じ部分が多いものの、一部大きく異なる分析を行っているため、ここで紹介する。

Seiter (1980:2) によれば、ニウエ語の動詞句構造は以下のようである。

Tense	}	—Auxiliaries	—VERB	—Manner	—Directional	—Clitics
Aspect				Adverbs	Adverb	
Mood						

ニウエ語の方向詞相当グループは、この directional adverb (方向副詞) とされており、「動き、発言、しぐさ、感情、認知、感覚」の動詞に後続する。注目すべき点はこの類に含まれる語が 2類5語あるという点である。

- i) mai ‘toward the speaker’ (移動、しぐさ、感情など)
 - atu ‘toward hearer’ (移動、しぐさに付加される場合、<3人称へ>としても使用される)
 - age ‘away from both speaker and hearer’ (toward a third person) (発言、授与に限られる)
 - ii) hake ‘upwards’
 - hifo ‘downwards’
- }

話し手との関連付けが無い

他の言語の場合と同様、それ自体が動詞として使用されうるが、その場合の意味は mai, atu, age の3語に関してはいずれも“give”となるとしている。そしてこの場合でも、mai なら「私にあげる」、atu なら「私があなたにあげる」、age なら「私が彼(ら)にあげる」というよう

action, +SPE specific, -SPE -specific, STA spatial particle, TOW towards subject.

¹⁶ ニウエ語は太平洋上 (ニュージーランドの北東、サモアの南東) に存在する国家ニウエを中心に分布する言語で、同国の公用語の一つともされている。母音は a, e, i, o, u と対応する長母音 ā, ē, ī, ō, ū、子音は p, t, k, m, n, ŋ, f, v, h, l がある。基本語順は VSO である。

に、方向副詞の場合と同様の〈向き〉を保つ。

また、マオリ語での Bauer (1993) の記述と同様、Seiter (1980:83) によればニウエ語の方向副詞のうち mai, atu, age は 3 人称の語りの場合、使い分けによって「視点の移行をマークする」という見方をしている。

以上のように、Seiter (1980) の分析では、ニウエ語ではまず方向詞を構成する語彙が今まで見た言語と比べると多いうえに、話し手との関連付けの有無による下位分類¹⁷や、本動詞として機能した場合でも〈向き〉の情報が具体的に保たれるなど、東部ポリネシアの諸言語とはわづかではあるが明確に性質の違う記述が行われているといえる。

1.6 参考 (2) : 祖語における方向詞

1.4 まででは、方向詞について、東部ポリネシア諸言語における基本的な記述を見たが、当該地域ではこうした各言語のデータより、比較言語学的な研究もおこなわれている。

方向詞とされる 4 語は、ポリネシア祖語 (Proto-Polynesian) の段階ではおおむね *mai, *atu, *ake, *hifo の形であったとされている。

ただし、それより遡ることもできるとされ、POLLEX (Polynesian Lexicon Project) を参照すると、さらに、(i) upwards (*sake) / toward the speaker (*mai) をオセアニア祖語に、(ii) away from speaker (*atu) / downwards (*sipo) をその上のマラヨ＝ポリネシア祖語に再建し、また mai 自体は更にさかのぼって come の意味でオーストロネシア祖語に *um-a(R)i として再建されている¹⁸。

祖語研究の段階になると、どのようなく向き〉のときに用いられるかを明確にするのは難しくなるが、いずれにしても個別言語ごとに現在認定されている数や用法にバリエーションが生じているものの、意味の点、また句中の位置の点で共通する要素は (東部) ポリネシアを越えて発見される。本稿では考察対象をポリネシア諸言語に限定しているが、他のオーストロネシア諸言語の空間表現研究の多様な先行研究の知見を考慮に入れることもまた肝要である。

2. 考察

1 節では東部ポリネシアの諸言語を中心に、ニウエ語や祖語での扱いを含め、各言語における方向詞の現在までの代表的な記述をごく簡単に見てきた。本節ではそれをもとに、方向詞の統語論上の位置づけ・問題点について、特にハワイ語における記述の精緻化を念頭に置いて考察を行う。

2.1 「方向詞」というカテゴリ設定における着眼点

比較言語学的に見て、(東部) ポリネシア諸言語よりさらにさかのぼることができることか

¹⁷ 意味上の問題だけでなく、hake と hifo が動詞として働く場合には、例外的に mai との共起が認められる (その他の場合、方向副詞は相補的關係にある) など、統語上の制約にもこの分類を支持する現象がある。

¹⁸ 一方、Blust and Trussel (2010) では、*atu を多少懐疑的ながら proto-Marayo-Polynesian に置き、downwards 相当の *sipo、*mai は Proto-Oceanic に認めつつ、更に遡り Proto-Austronesian の *ai “come” を再建している。

ら、ポリネシアで aku/atu, mai, a'e/ake, iho の4語が空間表現や移動に関連する意味をもって早い段階から存在していたこと、またそれらが現在に至るまで何らかの形で各言語に引き継がれていることは確かである。しかし、文法記述において「方向詞」というカテゴリをどう設定し、何がそこに含まれるかについては別に考える必要がある。

後者については、単独で使用される場合を除けば、句中における位置はどの言語でも「動作・行為等を示す内容語の後」という点で4語が共通しており、同句中の他の要素との相対的位置関係も概ね共通している。しかし同時に、どの言語を見ても、“aku/atu”と“mai”の組と、“a'e/ake”と“iho”の組との間では、統語的・意味的に何らかの振る舞いの差が生じている。また、ラパヌイ語で aku/atu と mai の2語のみを方向詞とする見方は、ステータスの違いが2類の間に存在することを示唆しているといえる。

さらに、何が含まれるのかを記述する際の基準になる「方向詞がどのようなものであるか」、特に「どこまでが方向詞であるか」については先行研究でのコンセンサスはない。動詞後続というプロトタイプ的なものは認められるが、どの言語をとっても、次節で見ると例えば本動詞（主に動作動詞）として働く場合は「方向詞」の用法の一つなのか、名詞句中での使用はどこまで自由でどれくらい限定されるのか¹⁹、等の問題が考えられる。

もちろん、これらの問題は現状の「方向詞」というカテゴリの存在自体を否定することには繋がらない。ただ、現状多くの場合「いつ使える」「どんな意味・機能を担う」要素であるか見えてこない、散発的な言及になっていることは問題である。

2.2 ハワイ語の「方向詞」記述

2.2.1 統語論研究の観点から

2.1を踏まえ、更にハワイ語の方向詞記述に対象を絞って考察する。

まず前節で挙げた、方向詞が aku/mai, iho/a'e の2グループあることはハワイ語の場合でも当てはまる。ハワイ語における両者の違いの詳細は更なる分析を要するが、前者は必ず、動きの方向を表現するため、基準となる点を必要とする「直示的表現要素」であり、後者は必ずしもそれを必要としない「絶対軸表現要素」であると考えられる。

また、岩崎 (2014) で使用したテキスト資料では、aku・mai・iho・a'e の4語を検出する際、語形での検索後のラベル付け段階では、空間移動の<向き>、抽象物(権利・知識など)の移動の<向き>、比較、時間表現(主にはイディオムの使用)については方向詞に含めた。しかし用例の中には i) それ自体が本動詞として働く例、ii) 名詞句中で働く例、iii) “mai”が名詞を導く前置詞として働いている例、のように境界的なものが多数含まれていた。

ここまで見てきた東部ポリネシア諸言語の記述を念頭におき考えると、i) に関しては特に mai, iho についてはっきり認められるが、ハワイ語のように音素の少ない言語では特に、音形が同じだからと言って方向詞の一部であるとは言えない。また、次のような例文もある。

¹⁹ 注5でも触れたが、この点についても、ポリネシア諸言語の場合、内容語(動詞・名詞・形容詞・副詞に相当する語)の語類設定の問題が複雑であることもあり、方向詞単独の問題ではないといえる。

(12)

... "He kanaka ohule, e iho mai nei, hinuhinu launa ole ka lae."
 ART man bald TA DIR? DIR DEM shining friendly NEG ART forehead
 「(…その人が言った。)『禿げた男が来る。その額は酷く光っている』」 (Elbert 1959:91)

ここで、iho には動詞の進行相を示す e-nei が付加されており、更に同じ方向詞の mai が付加されている。こうした例は他にも見られ、aku, mai, iho, a'e は互いに排他的な関係とはいえない。方向詞が同句中に複数現れることができるとしても良いが、むしろ動詞用法は、元は同じでも共時的記述に典型的な方向詞とは区別する方が明瞭になるように思われる。

ii) については動詞が名詞化されたもの、それも動作性強調の要素である 'ana²⁰ を伴った場合が大半であり、同じ語が名詞化を受けず動詞として働いた場合との差異が見出しにくい。これは動詞句中の用法に準ずるものと考え、ある文で位置や他の機能語との共起関係から名詞と判断できる語であっても、それが動詞的な・動作を示す意味を持つ語であれば方向詞により「向き」の表示ができるとみればよい。

iii) の前置詞としての用法は、全ての方向詞に見られるわけではなく mai 特有のものと考えられ、Elbert and Pukui (1979)、Pukui and Elbert (1986) なども、方向詞の mai と前置詞の mai は別項目にしている。前置詞の mai は名詞句を導くことから、文中での可能な位置もまた異なるのであり、その点でも方向詞と別のものに思われる。

しかし意味の点から見れば、この前置詞は英語の from 相当であり、話し手にとって「ある場所からレファレンスポイントに向かってくる」というフレームである点に変わりはない。ここに、それ自体が動詞として働くとき話し手の方へ「招く」意を示す mai を合わせて考えた場合、記述上お互いを関連付けるのが自然であるともいえる²¹。

以上、形式の面と意味の面からそれぞれ考えると、「方向詞の用法をどこまでとするか」という問いの設定よりも、たとえば図1の mai の場合のように、各語の用法の展開を記述する方法が、可能な用法や意味をより把握しやすいと本稿では提案する。

修飾語的用法では、副詞的用法としたのが動詞に後続する場合の典型的な方向詞の場合、形容詞的用法としたのが行為名詞に後続する場合である。ハワイ語の品詞認定では一般的に、副詞も形容詞も状態動詞として記述されているため、動詞寄りの用法としてまとめた。

筆者としては、共通する意味を有する多様な統語的機能を持つ音形 mai や、aku, iho, a'e を、句中の位置の点から「方向詞」と総称する立場を否定するものではない。しかし、形式と意味とを同時に考慮した切り口の記述もまた有用であり、少なくとも並行して参照文法に含まれてもよいと考える。

²⁰ 'ana の機能については岩崎 (2012) で論じている。

²¹ ただしこれが祖語由来であるかどうかは慎重である必要がある。例えば、マルケサス語では方向詞としての mai 以外に、ハワイ語の場合と類似の前置詞の形は mei として現れている。

MAI: TOWARDS THE REFERENCE POINT

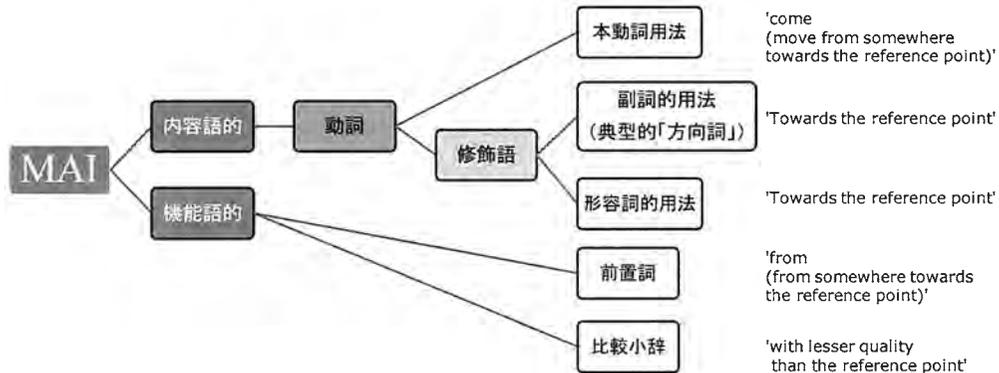


図1 ハワイ語の語“mai”が担う機能²²

2.2.2 補足：学習の観点から

最後にハワイ語の現状に即し、「学習のための記述」という側面から方向詞記述について触れておきたい。本稿導入部で触れたとおり、ハワイ語は再活性化運動が盛んであるとはいえ、現在は日常使用の言語というより特定の文脈に使用が限定されており、英語話者の「学習言語」という地位にある。そうした教育が盛んになる過程では Elbert and Pukui (1979) のような、包括的かつ当時、あるいは今に至るまで、最も詳細な参照文法をもとに教育が行われていったといえる。その分、出版当時「使用規則を立てるのは困難であり、先例に従うのが賢明である」とされていた方向詞は、4語の基本的な意味こそ説明されているが、もっとも分かり易い「行く・来る」や「やりもらい」以外、比較や時間表現をイディオムとして個別に覚える形でしか扱われてこなかった。

語学学習をする際、日常使用されていた時代のテキストに頻出する機能語について、「いつ使用できるのか」「いつは使わなくてもよいのか」のような目安が提示されていることが望ましい。自然言語期のハワイ語を文化的に重要視し保存していくという教育上のモチベーションを考慮すれば、「任意の要素である」と一般に見られていることを理由に方向詞の使用を縮小させることに繋がる記述は特に望ましくないはずである。よって、方向詞に限らないが、統語論研究は、教育・保存の観点からも、今後も積極的に行われることが期待される状況にある。

ただし、統語論記述ではシンプルルールへの還元と同時に、細則の設定により可能な限り精緻なルール化を企図する機会が多いが、これがそのまま学習者の利益には繋がらないのも事実である。統語論的正確さと学習アクセス上の利点を合わせて考えると、差し当たっては「話し手」中心の教科書的記述を、「その場の焦点人物 (レファレンスポイント)」から見た方向、のように、学習者が目にする事の多い narrative など 3 人称文や、話し手が非参与者である

²² 比較小辞については塩谷 (2007) を参照した。ただし、塩谷 (2007:20) は正確には「A<B の比較の表現で用いられる」と述べており、意味の注釈については筆者の解釈によるものである。

場合の使用を含めた形に変えるのが妥当であると考えられる。

3. 今後の課題

今回見た言語については、いずれも方向詞とそれ以外の空間表現とを関連付けて論ずることが必要であると考え。特にハワイ語については、位置名詞 (locational noun) や指示詞との共起関係など、十分に考察されていない事項が多くある。本稿は解決すべき点の指摘と整理方式の仮説段階にとどまっているため、mai について提案した方法自体の妥当性の検証と、mai の場合に準じた他の方向詞の記述を試ることが喫緊の課題である。また、レファレンスポイントの移行についても、何らかの制約がある可能性を考慮し、マオリ語における Bauer (1993) のように、物語文などの詳細な分析が必要である。

さらに、ハワイ語のダイクシス研究はまだ十分ではないが、話者へのインタビューの困難さなど、研究上使用できるリソースが限られる言語では難しい部分もある。それを打破するため、今後も比較研究を通じて、差異を意識すると同時にそれでも通底するものに着目し、情報不足を補うことが有効かつ必須である。^{23 24}

略号

1, 2, 3	人称	LOC	位置小辞
ART	冠詞	NEG	否定辞
CAUS	使役	PART	その他小辞
DEM	指示詞	PL	複数
DIR	方向詞	PREP	前置詞
DOBJ	直接目的語	REA	現実相
IMP	命令法	SG	単数
		TA	テンス・アスペクトマーカー

参考文献

Bauer, Winifred, William Parker and Te Kareongawai Evans (1993) *Maori*. London; New York:

Routledge.

Cook, Kenneth William (1996) The Temporal Use of Hawaiian Directional Particles. In. Pütz, Martin

and René Dirven (ed.), *The Construal of Space in Language and Thought*. Berlin; New York:

Mouton de Gruyter, 455-466.

²³ 特に Cablitz (2006) のように非常に詳細な研究はインタビュー調査の恩恵によるものであり、近い関係にありかつ同様の調査が困難であるハワイ語にとっても、示唆に富んだ記述である。特に evidentiality や telicity と方向詞を関係づけている点に注目すべきである。

²⁴ なお、方向詞に限らずポリネシアの言語研究では、英語またはフランス語を母語とする研究者が大半を占めている状況にある。日本をはじめ、特に非印欧語を母語とする研究者の知見も積極的に提示されることが望ましいといえる。

- Cablitz, Gabriele H. (2006) *Marquesan: a Grammar of Space*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter
- Du Feu, Veronica (1996) *Rapanui*. London; New York: Routledge.
- Elbert, Samuel H. (ed.) (1959) *Selections from Fornander's Hawaiian Antiquities and Folk-lore*.
Honolulu: University of Hawaii Press
- Elbert, Samuel H. and Mary Kawena Pukui (1979) *Hawaiian Grammar*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Harlow, Ray (2007) *Maori: a Linguistic Introduction*. Cambridge, UK; New York: Cambridge University Press.
- Hohepa, Patrick W. (1981) A Look at Maori Narrative Structure. In. Hollyman, Jim and Andrew Pawley (eds.) *Studies in Pacific Languages and Cultures: in Honour of Bruce Biggs*. Auckland: Linguistic Society of New Zealand, 35-46.
- Hopkins, Alberta Pualani (1992) *Ka lei ha'aheo: Beginning Hawaiian*, Honolulu: University of Hawaii Press
- Pukui, Mary Kawena and Samuel H. Elbert (1986) *Hawaiian Dictionary: Revised and Enlarged Edition*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Roberts, Sarah J. (2013) Pidgin Hawaiian. In. Michaelis, Susanne Maria et al. (eds.) *The Survey of Pidgin and Creole languages. Volume III, Contact languages based on languages from Africa, Asia, Australia, and the Americas*. Oxford: Oxford University Press, 119-137.
- Schütz, Albert J., Gary N. Kahāho'omalua Kanada and Kenneth William Cook (2005) *Pocket Hawaiian Grammar: a Reference Grammar in Dictionary Form*. Waipahu: Island Heritage Publishing.
- Seiter, William J. (1980) *Studies in Niuean Syntax*. New York : Garland Publishing
- 岩崎加奈絵(2012) 「ハワイ語における機能語‘ana」 『東京大学言語学論集』第32号, 23-36
- (2014) 「ハワイ語方向詞の数的分布」 『第148回日本語学会予稿集』
- 塩谷亨(1999) 『ハワイ語文法の基礎』 大学書林
- (2007) 「ポリネシア諸語の比較表現における方向詞」 『室蘭工業大学紀要』57, 17-24.

参考URL

- Blust, Robert and Stephen Trussel (2010) (*revision 3/29/2014) *Austronesian Comparative Dictionary*, web edition, <http://www.trussel2.com/ACD/> (Accessed 4/18/2014)
- Greenhill, Simon J. and Ross Clark (2011). POLLEX-Online: The Polynesian Lexicon Project Online. *Oceanic Linguistics*, 50(2), 551-559., Honolulu: University of Hawai'i <http://pollex.org.nz/> (Accessed 4/18/2014)
- Lewis, M. Paul, Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.) (2013) *Ethnologue: Languages of the World*, Seventeenth edition. Dallas, Texas: SIL International.
Online version: <http://www.ethnologue.com> (Accessed 4/25/2014).

“Directional” in Eastern-Polynesian Languages: from the Standpoint of the Description of Hawaiian Directional

Kanae IWASAKI

kanaiwasaki@hotmail.co.jp

Keywords: Hawaiian, Eastern-Polynesian languages, directional, spatial expression

Abstract

The directional, or directional particle, is a kind of functional words which is widely used in Eastern Polynesian languages. Typically, the directional indicates directions of actions or movements denoted by following content words (mostly verbs).

Current grammatical descriptions, however, have not sufficiently explained its features, such as: when and how it can be used, who or what can be the referent point to encode directions, and how such points can be shifted as stories or conversations proceed.

In this paper, the descriptions of the directional in four Eastern Polynesian languages and Niuean are briefly examined in order to improve current grammatical description of the directional in Hawaiian.

The results are as follows:

- 1) In Hawaiian syntactic description, directional words *aku*, *mai*, *iho*, *a'e* should be divided into two subgroups, though it has not been used widely in the grammar of the language yet: “deictic” *aku/mai* and “absolute” *iho/a'e*.
- 2) In order to clarify the breadth and diversity of the possible usages of the superficially same sound and word forms (i.e. *aku*, *mai*, *iho*, *a'e*), both syntactic and semantic aspects should be simultaneously incorporated into its systematical description, instead of simply trying to define the range of the meanings which directionals can have. Finally, as an attempt to describe them in such a way, a chart of *mai* is shown.

(いwasaki・かなえ 東京大学大学院博士課程)